

着用過程において発生するシームパッカリングについて
日本女大家政 ○邱魏 津、 島崎 恒藏

目的 衣料品は、購入してから着用後も安定して美しい外観を保つことが要求される。この観点からシームパッカリングは一つの留意点となるが、購入直後は何も異常はみられなくても、着用中にシームパッカリングが表面化してくることがある。したがって縫製工程においては、縫製直後の縫目の状態だけでなく、経時的な変化も考慮して縫製に関する条件を設定する必要がある。特に着用において繰り返される洗濯には十分な配慮が必要である。本研究では洗濯操作がシームパッカリング発生とどう結びつくかを検討する。

方法 試布は性状の異なる3種類の織物（綿、綿・ポリエステル混、ポリエステル）と2種類の縫糸（綿糸、ポリエステル糸）を選択し、本縫いミシンにより張力を2段階に設定し縫製した。縫製後、バキュームプレス台とアイロンを用い、水分を付与し縫目部分を平滑化し生じたパッカリングを補正した。これらのサンプルを常温水に浸せき、あるいは家庭用洗濯機により洗濯操作を加え、脱水し自然乾燥した。縫製後、アイロン処理後、浸せき・洗濯処理後のそれぞれの段階で、縫目の縫い縮み率の測定とパッカリングの視覚評価を行った。

結果 シームパッカリングはアイロンやプレスによって補正することが可能である。しかし、このような対処法は一時的なものといえ、常温水に浸せきするだけでもかなり表面化し、洗濯操作を加えた場合には、一層それが顕著であった。この洗濯によるパッカリングの発生を理解するために、試布や縫糸の挙動を別途モデル的に測定したが、ある程度パッカリングの発生傾向を説明することができた。